Osaka University Knowledge Archive

Title	中国新出土文献の研究 : 上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡
Author(s)	金城, 未来
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27266
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【4】

氏　　名	金　城　未　来（きん　じょう　み　き）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０４７　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**中国新出土文献の研究　— 上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡 —**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　湯浅　邦弘 （副査） 教　授　高橋　文治　　教　授　荒川　正晴

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、近年中国で次々と発見されている新出土文献（竹簡資料）を、思想史研究の立場から取り上げ考察を加えるものである。対象とする文献は、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）、清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）、銀雀山漢墓竹簡（銀雀山漢簡）の三つであり、全体はこれらの文献ごとに、第一部「『上海博物館蔵戦国楚竹書』の研究」、第二部「『清華大学蔵戦国竹簡』の研究」、第三部「『銀雀山漢墓竹簡』の研究」、の全三部計六章からなる。冒頭に序文、各部ごとに小序・小結、巻末に、新出土文献用語解説、新出土文献における文字の通用例、主要竹簡の形制一覧や文献提要など六つの附録を加える。分量は、400 字詰め原稿用紙換算で約 630 枚である。

第一部では、申請者が修士論文で取り上げた上博楚簡『鄭子家喪』を再検討し、『左伝』や『史記』など伝世文献との比較も行いながら、その楚文献としての特質（楚の鄭討伐を正当化する内容）、および教戒書（太子教育書）としての文献的性格を明らかにする。また、同じく上博楚簡で、成王と周公旦の問答が見える『成王既邦』を取り上げ、詳細な釈読を提示した上で、周公旦を顕彰しようとする儒家系文献としての性格を明らかにする。

第二部では、2010 年から公開が始まった清華簡を取り上げる。公開されて間がないために、日本でも中国でも、まだまとまった研究は見られないが、所収文献いずれも、『尚書』や『逸周書』との関連が指摘されている重要な新資料である。ここでは、この内の『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』と『尹誥』に着目し、『金縢』については、現行本『尚書』金縢篇との比較を通して、特に金縢篇で難読とされてきた箇所について検討するとともに、その文献的性格を明らかにする。また、孔壁古文佚書の一篇『咸有一徳』との関連が指摘されている『尹誥』については、文中に登場する「伊尹」（湯王に仕えた聖賢）の呼称に注目し、伝世文献と比較しながら、清華簡における呼称表記の特色を明らかにする。

第三部は『銀雀山漢墓竹簡』の研究である。銀雀山漢墓竹簡は、1972 年に山東省で発見された新出土文献であるが、1985 年に『銀雀山漢墓竹簡［壹］』が公開されて以降、刊行が滞っていた。そして 2010 年に、ようやくその［貳］が刊行されたことを受けて、この第三部で、［貳］所収の「論政論兵之類」の中から、「兵之恒失」篇と「五議」篇を取り上げ、それぞれの全体構造と思想的特質について検討する。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、申請者の修士論文「上博楚簡『鄭子家喪』の研究」（平成 21 年度提出）、および学術誌に既発表の論文五本を基に、さらに、書き下ろしの二つの章と附録などを加えて再編したものである。

新出土文献の研究は、郭店楚簡・上博楚簡に続き、近年、清華簡や『銀雀山漢墓竹簡［貳］』の公開によって、また新たな局面を迎えている。古文字の用例が増加して、難読文字の釈読の手がかりが増え、古逸文献の相次ぐ公開によって、中国古代思想史に多くの新資料が提供されているのである。こうした中で、本論文は、上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡の三つを取り上げ、それぞれ精力的な分析を行っている。

第一部では、上博楚簡の二つの文献を取り上げているが、そこに共通するのは、精緻な釈文の作成である。修士論文の段階では、この釈読に関して、なお未熟な部分も見られたが、本論文では、古文字学研究の成果を積極的に取り入れ、豊富な語注を加えながら、釈文の作成に努めていると評価できる。また、内容分析についても、伝世文献との比較を入念に行い、楚系文献としての思想的特質を明らかにした。

第二部では、これまで字義未詳部分を含むとされてきた現行本『尚書』金縢篇について、清華簡『金縢』と詳細な比較を加えることにより、一つの読解の可能性を示すことに成功している。出土文献が現行本の読解に影響を与える一例であろう。また、「伊尹」の呼称問題については、これまでの出土文献研究では着眼されなかった点で

あり、今後、出土文献の用例が増えるにつれて、こうした研究も大きく展開して行くと期待される。その取りかかりとして重要な一章である。

第三部では、銀雀山漢墓竹簡所収の古逸文献である「兵之恒失」篇と「五議」篇を取り上げ、その兵権謀的兵書としての特質、および現実的政治論としての特色を明らかにしている。また「論政論兵之類」全体にも視野を広げ、その文献的意義について仮説を提示するなど、中国古代兵学思想研究という点でも、注目される成果をあげている。

ただ、本論文では、三つの出土文献を一度に取り上げたため、部や章ごとの連続がそれほど緊密ではなく、論文全体としての体系性、一貫性という点において、なお不十分な印象が残る。また、出土文献の個々の文字の認定・解釈や、楚簡と楚地域文化との関係性についての考察など、残された課題は多い。

とは言え、本論文は、新出土文献を積極的に取り上げ、各文献を丹念に精読した重要な研究成果である。特に、まだほとんど研究のない清華簡や『銀雀山漢墓竹簡［貳］』所収文献をいち早く取り上げて検討した点は高く評価できる。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。